

No.2604

在朝日本人社会に関する歴史社会学的研究
—「韓国併合」前後、日本人共同体の空間に注目して—

東京大学大学院総合文化研究科 博士課程
李 東勲

◎研究の概要

本研究は、19世紀後半から朝鮮半島に移住した日本人の社会に関する研究である。朝鮮の開港後、朝鮮半島に移住した日本人、いわゆる「在朝日本人」の歴史はおおよそ70年に及ぶ。1877年の釜山の開港から、1945年の終戦による引揚まで、数多くの日本人が朝鮮半島に移住した。終戦当時は70万人以上の日本人が居住していたとみられる。朝鮮半島に渡った日本人は、朝鮮総督府の役員・警察・教員などの官吏をはじめ、軍人、商人、農民、労働者、芸妓など様々な階層の人々であった。本研究は、植民地権力側の官吏ではなく、朝鮮人と同じく植民地支配下に置かれていた民衆に焦点を当てた研究である。

◎研究成果

本研究は、明治・大正期における在朝日本人社会の形成・定着期に注目しているが、日本人居留地の特徴的な都市施設として挙げられるのが二つある。それは神社と遊廓である。日本人の居留地には神社と遊廓が設置され、宗教的な空間と世俗的空間が混在する植民都市を形成していた。居留地の空間をめぐる議論からは、明治・大正期の日本人の共同体意識が読み取れるが、それと同時に神社や遊廓を必要とする社会的需要も確認できる。これらの都市施設を支えていた社会的構造を明らかにすることを目標とし、今後考察を深めていく予定である。

なお、2014年11月に日本植民地研究会秋季大会において「植民都市仁川と築港工事—在朝日本人社会の動向を中心に—」という題目の下で口頭発表を行った。1910年代における仁川港の築港工事に着目し、日本人社会の動向と関連づけて植民都市の形成を考察したものである。日本人社会では「築港工事は仁川の死活問題」であるとの認識の下で、商業会議所を中心に韓国政府や統監府に請願活動を行った。この活動の影響もあり、築港工事は「韓国併合」直後に朝鮮総督府によって決定され、「東洋唯一の二重閘門式の船渠」が竣工することになる。仁川在住日本人の念願であった築港をめぐる議論からは、仁川の繁栄や末永い永住を願う植民者の意識が確認できる。この報告内容は、今後学術論文として纏める計画である。